

岩手県花泉町貝鳥貝塚調査報告

草 間 俊 一

A Report on the Excavation of Kaitori Shell Mound at Hanaizumi, Iwate Prefecture

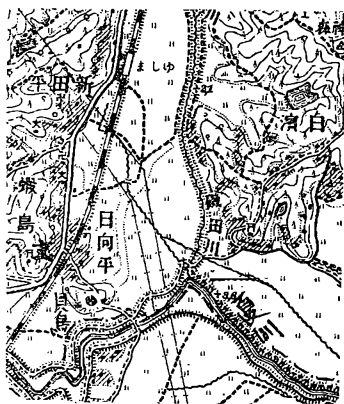
SHUNICHI KUSAMA

I ま え が き

貝鳥貝塚は岩手県の内陸部にある貝塚として知られ、「貝取貝塚」「蝦島貝塚」と称せられて注目されていた貝塚である。又本遺跡の一地主である佐藤辰三郎氏は祖父の代から三代に亘つて、耕作の際採集される土器・石器・土製品・小玉類・骨角器等さまざまな遺物を大切に保管所蔵しているので、本遺跡を踏査し、同氏所蔵の遺物を見学調査して行く好学の士も多い。そうして遺跡並に遺物についても一部は既に学界にも紹介されている^註。

しかし調査は過去に一・二度試掘が行われていると聞いているが、正式に調査したのは今回が初めてであり、これが契機となつて昭和32年8月中旬に二度目の調査が東京大学理学部人類学教室によつて行われた。最初の調査は昭和31年10月23日より27日までの5日間花泉町教育委員会主催で行つたものである。この報告はその調査の概略について述べたものである。

調査は花泉町教育委員会主催の下、東北大学教授伊東信雄氏の参加協力を得て、筆者が担当して行つたものである。調査に当つては一関一高教諭大島英介氏・盛岡市産業文化館主事吉田義昭氏・滝沢村一本木中学校教諭菊池満氏・釜石二中教諭三上昭氏・東北大学学生林謙作君等の参加協力を受けた外に、地元油島中学校（校長皆川一雄氏）の教官・生徒の援助を得て行つたものである。



第1図 遺跡附近地形図
○印 遺跡

調査の期間は農作物の合間を利用した短時日の間であつたので、調査は試掘の範囲を出ないものであつたが、主催者側の花泉町教育委員会の職員をはじめ、上記の参加各位の御尽力により、予期以上の成果を挙げることが出来た。しかし期日に制約されて、調査未了の部面もあるが、この調査によつて明らかになつたものを重点的に報告して、貝鳥貝塚文化の一端を明らかにしたいと思う。

なおこの調査によつて20数体の人骨が発掘され、調査範囲の拡大によつて更に多くの人骨が発掘される可能性があつたが、短い期間の調査である上に、専門を異にするので後日を期した。その後、翌32年8月東京大学教授鈴木尙氏によつて、更に10数体の人骨が発掘された。この二度目の調査に関しては無論のこと、今回の31年度の調査によつて発掘された人骨も、東京大学

註 貝鳥としたのは、地籍の小字名によつた。本貝塚についての関係論文は、吉田義昭著「岩手県関係考古学文献目録」（昭31.11刊）に挙げられているが、

主な著者名を挙げると、長谷部言人、中谷治宇二郎、直良信夫、江坂輝彌、酒詰仲男諸氏である。

人類学教室に送られているので、これらについての報告は鈴木氏によつてなされるものを期待したい。

本報告をするに当つて、調査に参加協力下さつた伊東信雄氏はじめ、大鳥英介・吉田義昭・菊池満・三上昭・林謙作諸氏、花泉町有志の方々や油島中学校職員生徒の方々への御協力に対して厚く感謝する。また調査に対して積極的に好意を示された地主佐藤辰三郎・佐藤三郎や千葉賢吉の諸氏や宿所の佐藤忠蔵氏などの方々へ厚く感謝の意を表す。本調査を計画実施された主催者花泉町教育委員会教育長滝口千里氏はじめ職員の方々、花泉町長田野崎文氏に対して厚く感謝の意を表す。

II 位置 現 況

貝島貝塚は岩手県西磐井郡花泉町油島に所在している。油島は岩手県南端の旧油島村で、大字油田と蝦島とからなつてゐる。貝島貝塚は蝦島にあり、宮城県境より500mに足りない所に位置する。この貝塚は迫川流域の貝塚群の一つで、花泉町涌津白浜貝塚と共に、その北端に所在する貝塚の一つである(第1図参照)。

貝島貝塚の所在する蝦島の丘陵は、東北本線の石越駅と油島駅との中間に位置し、東北本線に沿つて石越駅から北上すると、約2料にして蝦島の丘陵に行き当る。鉄道はその丘陵の東側を通つて北上している。この蝦島丘陵は、その南端で丘陵が東方に約400~500m張り出した舌状台地になつていて、鉄道はその張り出した丘陵のつけ根の所を切断して走つてゐる。貝塚はこの張り出した丘陵の部分にあり、東北本線より350m程東側にある。殊に佐藤辰三郎氏宅地の前後の傾斜面に最も良く形成されている。

貝塚の所在する付近で、丘陵の高さは標高20m内外で、巾は150m程ある。この丘陵はこの付近が最も良く開墾された畑となつていて、畑の表面に貝殻粒が相当散布しており、土器片なども表面採集出来る。

III 調 査 の 概 況

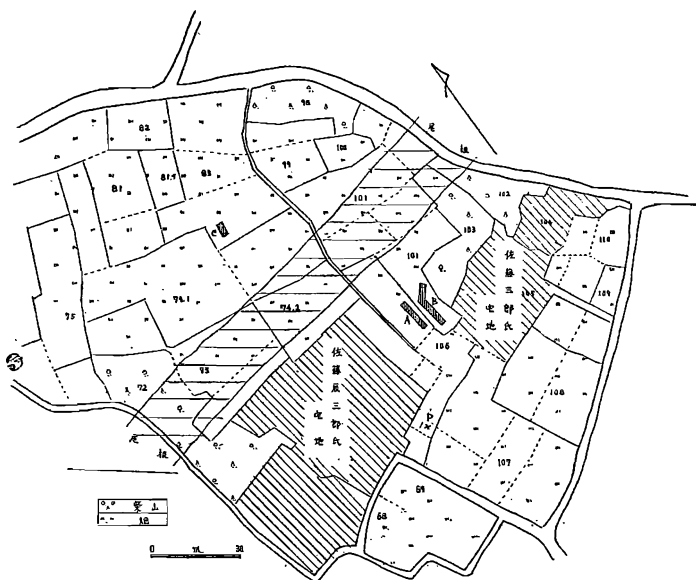
調査は、昭和31年10月23日より27日まで5日間行つた。当初の予定は10月中旬に行つた筈であつたが、その年の気候の関係で、畑作物の収穫がおくれたので、下旬に延期した。そのため次の播種期までの日時がなく、調査も追われるように終了せしめなければならなかつたので、調査未了の部分を残す結果となつたが、各方面の御協力後援助によつて、一応遺跡の内容を明らかにすることが出来た。

次に簡単に調査の経過を述べる。

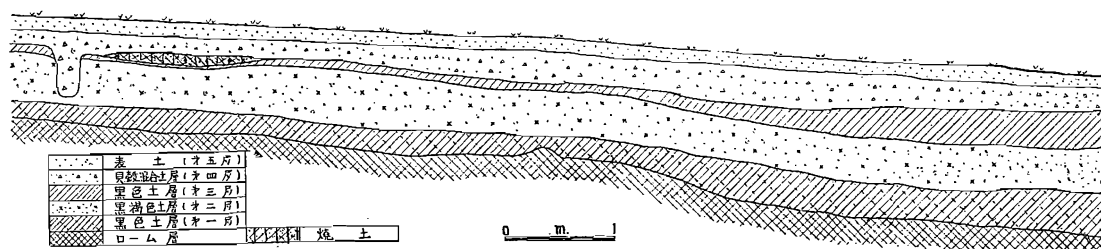
前日 10月22日(月)晴

午後現地に着。明日からの調査の打合せと、調査地点A・B二ヶ所を決める。菊池・三上両君本日より参加。

午後現地に着。明日からの調査の打合せと、調査地点A・B二ヶ所を決める。菊池・三上両君本日より参加。



第2図 調査地点附近地籍図



第3図 A トレンチ断面図

第1日 10月23日(火)曇後小雨

A・B両地点の調査B地点より人骨出土。午後降雨のための作業中止。吉田君本日より参加。

第2日 10月24日(水)曇

A・B両地点の調査。B地点の人骨発見数増加。伊東教授林君を伴って参加。主としてB地点の調査を担当。

第3日 10月25日(木)晴

A地点の調査終了。B地点は人骨20数体を数える。C地点を調査。

第4日 10月26日(金)晴

B地点の人骨を掘り上げる。C地点調査継続。炉址発見す。D地点試掘。伊東教授東北史学会のため夜帰省。吉田君も帰省。

第5日 10月27日(土)晴

各地点の調査を完了。午後4時調査を終る。

以上の全期間中、大島英介氏は一関一高社会部の生徒6~7名引率して参加し、油島中学校生徒は交代で一学級ずつ教官に引率されて協力した。最終日は花泉高校生20名の来援を得た。

A 地点

A・B両地点は佐藤辰三郎氏宅地の東側で、丘陵の尾根に近い南斜面である。A地点は佐藤辰三郎氏所有地であり、B地点はその分家佐藤三郎氏所有地である。(第2図)

A地点に東西2m・南北10mのAトレンチを掘って調査した。Aトレンチの地層は、ローム層より表土まで5層に区別された。第1層はローム層上の層で、黒褐土層である。傾斜面に自然沖積した土壌と考えられ、斜面の上の方は薄く20cm程で、下の方は40cm程ある。調査した範囲では遺物は発見されなかった。第2層は褐色粘土層で、比較的かたくしまっているが、その中には土器片や木炭の細粒が包含されされている。土器は縄文中期後半のもので、完形土器や復原可能な土器は一つもなく、破片のみであった。第3層は第2層の上に堆積した黒色土層で、遺物が発見されなかった。この層も斜面の上の方が薄く10cm足らずであるが、下の方が厚く30cmある。以上の第3層までには貝殻や骨角類などの動物の自然遺物やそれを加工した器具などは発見されなかった。(第3図)

第4層は貝殻包含黒色土層である。この層に包含された自然遺物は貝殻と鳥獣類の骨角類で、貝殻は淡水産貝類のタニシやタガイが主で、多量であったが、鹹水産貝類は極く少量であった。その他人工遺物では土器・石器・骨角器なども発見された。土器は縄文晩期と後期末のものが多く、後期でも前半のものは極く僅か出土したにすぎない。この第4層の一ヶ所に、焼土が厚さ5cm・巾60cmの広がりをもつて堆積していた。恐らく炉と推測され、付近から土器片が最も多く発見されたのみならず、Aトレンチ唯一の復原可能な土器(図版第一A図1)も出土している。

第5層は耕土となっている表土で、第4層の貝殻包含層の状態は全く破壊されて、貝殻も細粒と



第4図 B トレンチ人骨出土実測図

なり、土器片なども少破片が発見されるのみである。石器なども若干発見される。第2層との境には判きりした限界はない。厚さは15cm内外である。

B 地点

B トレンチはA トレンチの東方約4m離れてA トレンチに平行して、東西2m・南北10mの範囲を調査したものであるが、人骨出土のため更に東北方へ8m延長した範囲まで調査する結果となった。この地点は表土を除去すると人骨が発見されるので、以後人骨の発掘を主として調査が進められた。その結果、B トレンチの範囲から30体の人骨が確認された。人骨は斜面の上の方は浅い所より、下の方では割合に深い所より発見された。従つて上の方から発掘された人骨には耕作のため一部散佚しているのがあつた。

人骨は割合良く保存され、その埋葬の状態を明らかにすることが出来た。その埋葬されている状態を見ると、人骨が埋葬されている上部30cm位の所に、径20~30cm位の丸い石の存在することが第二次調査の際に注目されたが、第一次調査の際に明らかでなかつた。人骨は膝を折つた形の屈葬形式で埋葬され、手は体側に伸しているものが多く、その外に腹部を押えた形のもの、片方の手だけ腹部を押えているもの、肘を折つて胸部に両手をあてているものなどで、一定の形式をとつていない。頭の置かれる方向も一定せず、さまざまな方向に頭の位置があつた。(第4図)

B トレンチの地層は相当攪乱されていて、直ぐ隣りのA トレンチの地層のように明確でない。しかしA トレンチと同じ状態に地層が形成されていたと推定される。この推定に基づいて、人骨の埋葬されていた地層を考えると、第2層の褐色土層を掘り込んで埋葬していると見られるものが殆んどで、重なり合つて発見された北寄りの人骨の一部は相当浅い所からも発見されている。B トレンチに於いては第3層・第4層に当るものがなく、出土する土器はその形式から見て相当混在している。

即ち縄文中期の大木式土器も相当上層から発見されている。一方縄文晩期の大洞式土器も相当下層から発見されてる。このことは人骨埋葬の年代を推定する上に重要な点であると思う。



第5図 人骨出土状況

(第5節参照)

C地点・D地点

C地点とD地点は貝鳥貝塚の全体の状態を知るために、丘陵の北斜面と南斜面の夫々ヶ所に試掘して見た所である。北斜面では千葉賢吉氏所有地を選びC地点とし、南斜面では佐藤辰三郎氏宅前の畑をD地点とした。

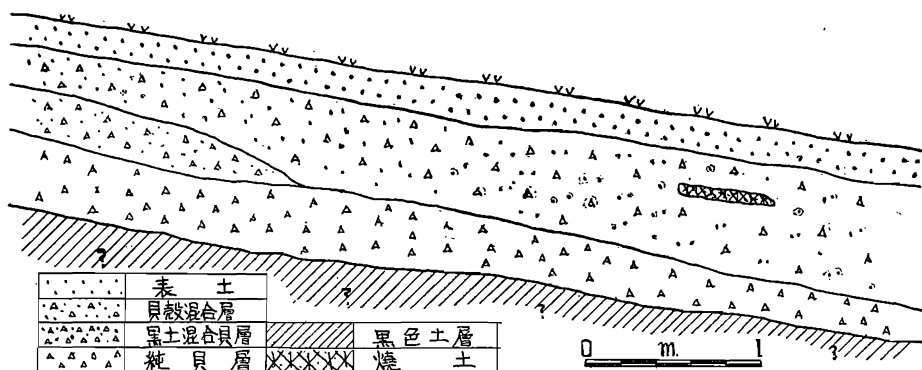
C地点では東西2m・南北5mのCトレンチを掘つて調査した。この地点はA地点より貝層が厚く、而も包含状態も良好であつて、骨角器や土器・石器などの人工遺物も割合多く発見された。又炉址と推定される焼土の堆積した箇所も発見され、その付近からは小形の完全土器(図版第一A図4)をはじめ、復原可能な土器(図版第一A図3・6)を含む多数の土器片が発見された。従つて住居址の発見される可能性もあつたが、麦播きの時期に追われて、調査を完結せずに終つている。調査未了で不十分な点もあるが、調査した範囲で明らかになつた地層の状況と遺物包含状態について述べる。

耕土となつている表土の厚さはA地点と同様15cm位の厚さで、土器片などが表面に散布しているのは変りはないが、貝殻の細粒は若干多いように見受けられた。その下は貝殻包含黒色土層になつていて土器片・骨角器等が多く発見されたことはA地点と同様であるが、Aトレンチより貝殻の包含されている量が多かつた。この層の厚さは60~70cmでA地点より厚く形成されており、その層の中間より若干上の位置にヶ所焼土の堆積があり、厚さ8cmで径50cmの拡がりをもつていた。焼土の周りには石組のないのはA地点と同様であるが、その焼土の周辺からは多数の土器が発見された。土器は大派C式のもの大部分であつた。この焼土の形成された時期の地表面がこの高さの所であつたとは云えないが、少くともこれ以下でなかつたことは明らかであることを考えると、C₂式土器の作られた時期には既に相当厚く貝塚が形成されていたことが明らかで、A地点の後期末の土器を伴う焼土が貝殻包含層の下の方に形成されていたのと比較されて興味がある。(第6図)

なおこの貝殻包含黒色土層は焼土の堆積する部分を除いて包含されている土器の形式を見ると晩期大洞A'式からB式までである。しかしそれら各形式の土器は地層の上下で判然と区別される状態で出土しなかつた。この層が混合土層であるところより見れば、過去に相当攪乱されているためかも知れない。焼土の部分は今後の調査も予定されているので、そのままに保存して置いた。

この貝殻包含層の下にはA地点で認められなかつた純貝層が、20~40cmの厚さで形成されていた。その下に黒色土層があるが、それ以下の部分まで調査を進める時間がなかつた。従つてこの黒土層がA地点の第1層に当るか、第3層に当るか判りせず、今後の調査に俟つことにする。

D地点は過去に大洞A'式土器が数多く採集された所であるとのことで、東西2m・南北3mの



第6図 C トレンチ断面図

範囲を調査した。その結果、A'式土器の包含されされる層は認められず、地層の状況はA地点と類似しているが、Aトレンチ第4層に当る貝殻包含黒土層に貝殻は殆んど包含されず、単純な黒色土層をなしていた。従つてこの層に土器・石器などの遺物の包含されるもの少なく、表土と殆んど変らない状態であつた。然しAトレンチ第2層に当る褐色土層には縄文中期末の土器片が若干多く発見されたが、復原出来るものはなかつた。

IV 出土遺物

本貝塚調査の結果出土した主なものは、埋葬されたと考えられる人骨20数体分をはじめとして、貝塚を構成している貝殻や骨角類などの自然遺物や土器・石器・骨角器・貝輪・土製品などの人工遺物は多種類に及んでいる。その中人骨について精しい報告は別に期待されるので、こゝでは私が調査した範囲で推定し得る埋葬年代だけについて後に述べたい。

I 貝類

貝類は貝塚を形成している主要な遺物で、その数量は多量である。その種類は淡水産貝類のタニシ類とタガイの二種類が大部分であつた。貝類は食用に供せられて貝殻の遺棄されたものと、貝殻を装身具として加工したものとに二種類に分類される。前者の食用を目的としたものは淡水産貝類の全部と僅かの鹹水産貝類であり、後者の装身具に加工されたものは鹹水産貝類だけであつて、淡水産貝類に加工したと見られるものはなかつた。

淡水産の貝類にはオオタニシ・マルタニシ・ナガタニシ・タガイが多く、その外ヒダリマキマイマイ・カワシンシユガイ・マシジミ・カワニナなどの貝類が認められた。鹹水産の貝類にはベンケイガイ・アカガイ・サルボウ・ユキノカサ・ハマグリ・ミルクイ・アサリ・マガキ・アカニシなどがあつた。

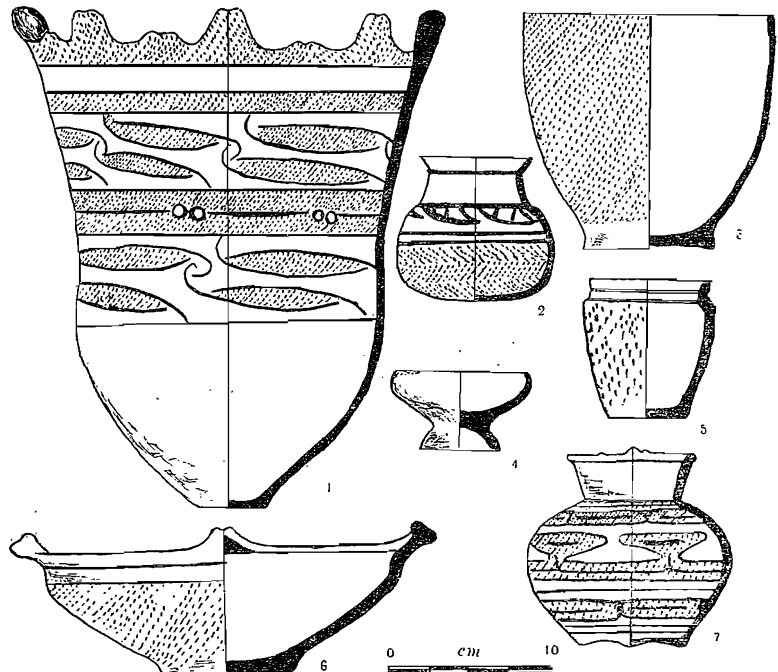
II 鳥獣類

鳥獣類の骨角なども貝塚に相当量混入していた。そのうちでもイノシン・シカ・ウサギなどの骨やシカの角が特に目立っていた。犬の骨が一匹分一まとまりとなつてAトレンチ第4層から発見された。他の獣骨が分散して発見されたのと異つて注目された。恐らく家犬として飼育されていたものが埋められたものであろう。

鳥類の骨も若干出土したがその種類は明らかでない。

III 土器

A・B・C・D各地点から発掘された土器は相当多量であるが、全部縄文土器であつた。その中完全なもの2個で



第7図 出土土器

復原出来るものは7個にすぎなかつた。その種類は次の12類に分類することが出来る。

第1類（図版第二1～7）縄文中期後半の文様を有する土器で、AT。（ATはAトレンチの略、以下これによる）第2層及びそれと類似する層から出上したもので、BT.に於いては上層にも若干混在していた。この土器は更に次の如く三つに分類される。Aは器面に隆起した線による渦巻文を施したもの（1）、その隆起線による渦巻文が幾分退化して、沈線文と磨消縄文の発達が見られて来るもの（2）、Bは沈線文と磨消縄文のみとなつて来たもの（3・4）である。この中でも後者の4は口辺に一条の沈線文を施している。この口辺の一条の沈線文によつて区劃された文様が主となつて、それ以下は縄文部だけになつものがCである。これらA・B・Cの三類は大木8b・9・10式と呼ばれている形式に類似しているが、その中2は9式に近く、4は10式に近い文様と思う。

これらはいずれも貝塚が形成される以前の土器で、貝層下の土壌に包含されているものであるが、相互の層位的関係は本遺跡の場合明らかでない。

第2類（図版第二8）私が川目第4類とした文様の土器で、縄文後期初頭に岩手県に作られたと考えられる土器である。この種の土器の破片は少なく、文様の判きりしたものでは図に示したものだけである。

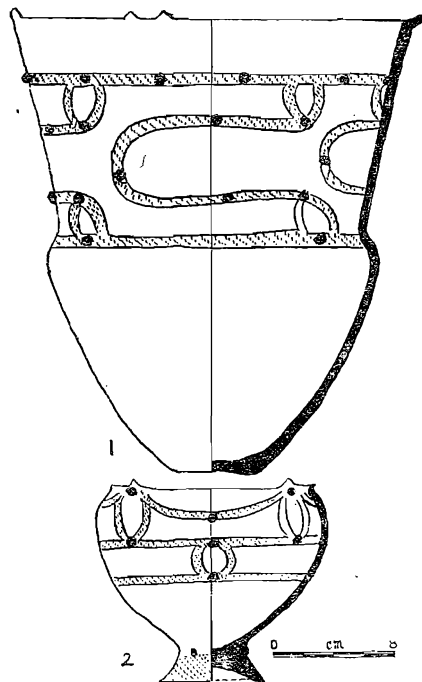
第3類（図版第二9・10）私が日戸第5類とした文様の土器で、縄文後期中頃に編年される土器である。この種の土器も多くない。次に述べる第4類以下の土器に若干混在しているに留まつている。

第4類（図版第二11～13）第3類に見られるテープ状縄文帯が曲線をなして器面に施されている土器である。その縄文帯は後期前半に見られるものより若干巾広く、渦巻文をなしていない。

第5類（図版第二14～16）第4類に見られたテープ状縄文帯は短く切れ、端の部分に旋転が見られる。文様の部分のところどころに小突起が付けられている。

第6類（図版第二17～20）短く切れた帯縄文が口辺に併行に施され、端の部分に旋転が施されている。第5類より文様の単純化している点が注目される。このような文様の単純化は小突起においても見られ、小突起が退化するか、無くなつて来ている。AT第4層出土の復原した土器（図版第一A図1）もこれに属する。

以上の2類以下の土器は貝殻混合土層にその後の土器と混在しているが、第2類・第3類はその数も少なく、如何なる条件で紛れ込んだか明らかでない。第4類以下になると類似の土器が多くなり、貝塚はこの土器の作られた時期には形成されていることは明らかである。そしてこの第4類・第5類・第6類の土器の文様を見ると相互に類似し、文様の上にその発展のあとをたどることが出来る。その上器壁も厚手で、次に述べる第7類以下の薄手の繊細な感じの土器と一応区別されるように思う。この点に於いてこれらの土器を縄文後期に属する土器と見たい。この中第6類は晩期大洞B古式とも称せられるもので、その文様に見られる旋転が晩期大洞B式の入組文の先駆をなすも



第8図 江刺家滝谷出土土器

のであり、縄文原体が繊細になつて来ている点において晩期的な特色も見られるが、図示した復原土器に見られる器形は明らかに後期的なものであり、岩手県に於いては第5類の文様に入れるべき九戸村江刺家滝谷出土の土器の器形に類似している点とその厚手の特色を多分にもつ点に於いてこれを後期に入れて置きたいと思う^{註1)}。

第7類(図版第二21~23)大洞B式とされている文様の土器で、胎土は精選され、薄手で文様は前者と比較して著しく繊細となる。入組文が渦巻形となつているのに特色がある。

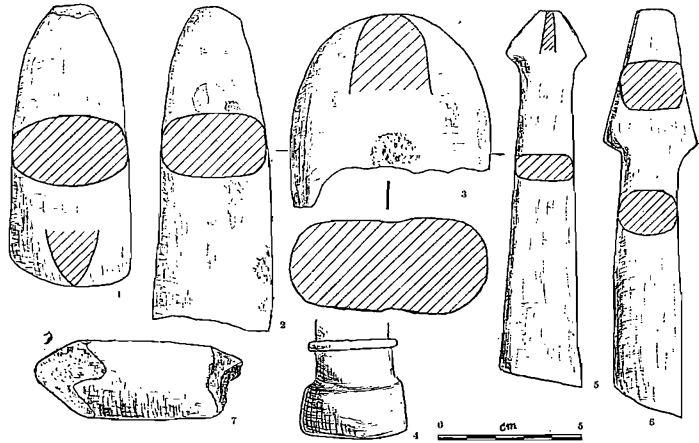
以下その渦巻状の入組文がくずれて羊歯状文となり、それが列点文に変化し、更に平行沈線文から工字文に変化して行く過程の文様の土器を中心に図版に示した。これを従来の分類によれば、第8類(図版第二24~28)大洞BC式、第9類(図版第二29~30)大洞C₁式、第10類(図版第二31~34)大洞C₂式、第11類(図版第二35~38)大洞A式、第12類(図版第二39~40)大洞A'式と一応分類出来るのではないかと思う。この分類についても二三考えているところもあるが、本遺跡の場合資料が充分でないので又の機会にゆずる。

これら第7類以下の晩期の土器は貝殻混合土層から相当多量に出土し、復原可能のものもあつたが、大部分は破片であつたのは遺跡が相当攪乱されているためではないかと思う。復原可能の土器は第8類で一個あり(図版第一A図2)、これはBT第10号人骨の背椎骨の下から出土したものである。その他では第10類が最も多く3個を数えることが出来る。これはCTの炉址と推定される付近が比較的良好に保存されていて、その付近から出土したものである(図版第一A図4~6)。その他BTの人骨の間から1個出土している(図版第一A図3)。第11類に属すると思うものは1個出土した(図版第一A図7)。これは、BT表土直下の人骨の上にとつところから出土したものである。

IV 石器

本遺跡出土の石器は佐藤辰三郎氏所蔵の採集石器含めれば、その種類も数も相当多い数になるが、今回調査した結果採集した石器を中心に述べたい。

石斧(第9図1・2)磨製石斧で、打製石斧は出土しなかつた。両側面は垂直で、上下両面は円味を帯びた三味線胴形の定角石斧の完全なものが1個、AT第4層より出土した。石材はホルンヘルスである(1)。BTの13号人骨の下から石斧が1個出土した。刃部は欠けているが、側面は前者より円味



第9図 石器実測図(1)

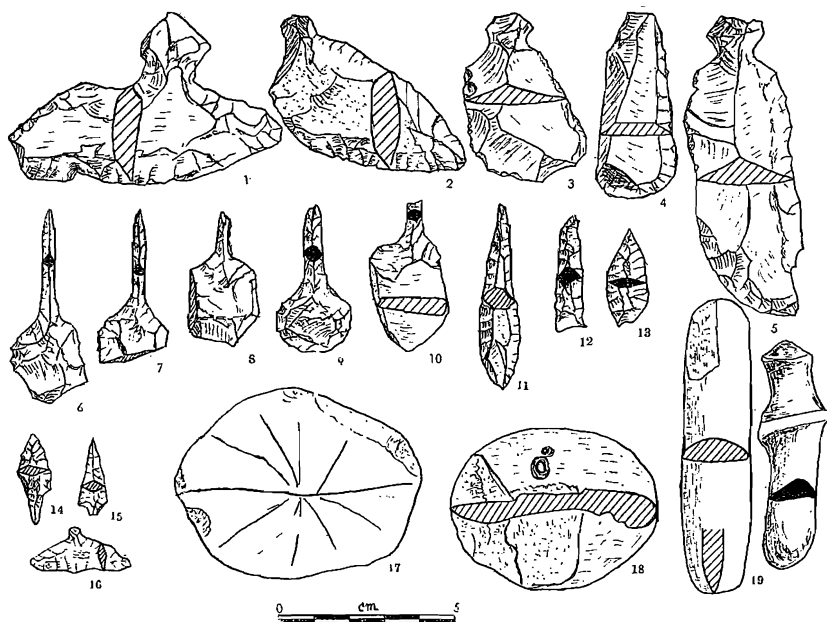
を帯び、上下両面は平らで、幾分長めの石斧である(2)。石材は硬質砂岩である。前者より古い形式の石斧と考える。今一つ小形の巾2cm・長さ8.5cmの鑿形の石斧が20号人骨の傍から発見さ

註 縄文土器の編年が三時期説をとるか五時期説をとるか問題とされるのは、その編年を支える文化の本質的な問題に基ずくものでなく、土器の文様、器形、焼成などによるものが多い。その点に於いて土器の編年の五時期を作られた先学の努力に敬服するが、

それが土器のもつ特色である点に於いて、上記の説をとり度い。なお江刺家出土土器は開田工事の際の採集品であるが、大洞式土器の特色のあるものは全くなく、第5類だけの文様の土器を出した単純遺跡である。

れている。胴部の断面は半円形で、下面は平らで上面は彎形している（第10図19）。石材は粘板岩である。これと類似した石斧は後期初頭の土器を出土した門前貝塚から数個出土していると吉田義昭君は語っている。

石棒（第9図4～5）発掘されたものはいずれも断片で、径4cm・長さ10cmの太い断片や石剣らしい加工を加えた石棒片もあつたが、形の明らかにし得るもの



第10図 石器実測図（2）

はなかつた。佐藤氏所蔵のものに形の判つきりした石剣があつたので、参考までに図示した。表面採集によるものであるから、いずれも晩期の石剣の形を示すものと見てよい。

発火石（第9図3）半分欠失した破片であるが、原形は楕円形と推定される。上下両面に若干のくぼみが出てきている。石材は石英安山岩である。

石ヒ（第10図1～5・16）完全なもの6個と破片3個の計9個である。中に蛋白石で作つた小形の美しい形のもものが1個ある（16）。形は縦形・横形の両形式があり、石材はチャートである。

石錐（第10図6～10）完全なもの3個と先端の欠けたもの2個計5個である。石材はチャートであるが、1個だけ硅化木のものである（7）。

石棒（第10図11・12）完全なもの1個と破片1個出土した。石材はいずれもチャートである。

石鏃（第10図13～15）有茎石鏃2個と柳葉形石鏃1個の計3個出土しただけで、数量は少なかった。石材は有茎のものに蛋白石のもものが1個あるが他はチャートである。佐藤氏は200個近い石鏃を所蔵していて、その形は種々であるが、省略する。

異形石器（第9図7・第10図20）二つある。一つは（第9図7）は短い石棒状の石の先端に磨研に使用したような痕跡をとゞめている。類似石器は岩手県九戸村田代の縄文前期の遺跡から出土している^註。石材はホルンヘルスである。

今一つ（第10図20）は小形の有角石斧形の石器であるが、刃部に刀のような反りがある。自然石に若干加工を加えたものではないかと考えられる。磨製のあとがなく、敲製と云わるべき面をしている。石材はホルンヘルスである。

有孔石器（第10図18）径6cmの楕円形の扁平な硅質凝灰岩の上部に鑿孔してある石器である。石器の原面の半分位剝脱しているが、原形をとゞめている。恐らく垂飾具として使用したものであ

註 拙稿「岩手県九戸村田代遺跡調査報告」（岩手大学学芸学部年報 第13巻）

ろう。

線刻石 (第10図 17) 長径7cm・短径 5.5cm
の不整楕円形の扁平なホルンヘルスの石の片面
に放射状の十本の線刻をしたものである。C₂T
の炉址の傍より出土したもので、C₂式の時期の
ものと考えて差支えないであろう。外に例を知ら
ないので一応報告だけにとめる。

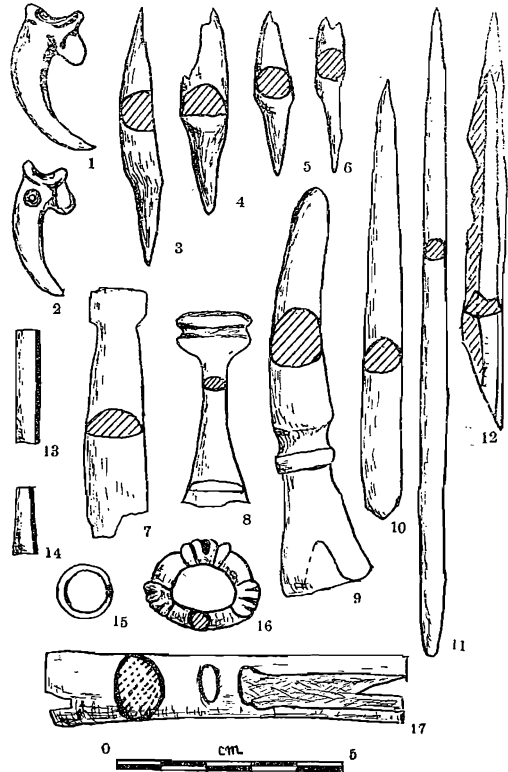
管玉・小玉 今回の調査に於いて採集されたもの
は一つもなかつたが、佐藤氏所藏品の中に硬玉
の管玉3個と小玉30個ほどある。

V 骨角器

骨角器は佐藤氏所藏品の中には少ないが、発
掘された種類は比較的多い。但し釣針類のない
のは後述する土錘の多いのと比較されて、本遺
跡の骨角器を特色付けている。

垂飾具(第11図1・2, 図版第一B図は第11図と
同じであるから以下参照され度い) ワシ科の趾
骨に孔を穿け垂飾具として利用したと思われる
ものである。1の方は未だ穿孔がないから除外
すべきものであるが参考までに掲げた。

根ばさみ (第11図3~6) 現今の骨製矢筈の



第11図 骨角器

形をしたもので、中央先端に抉り込みのある
ものである。4個採集された。

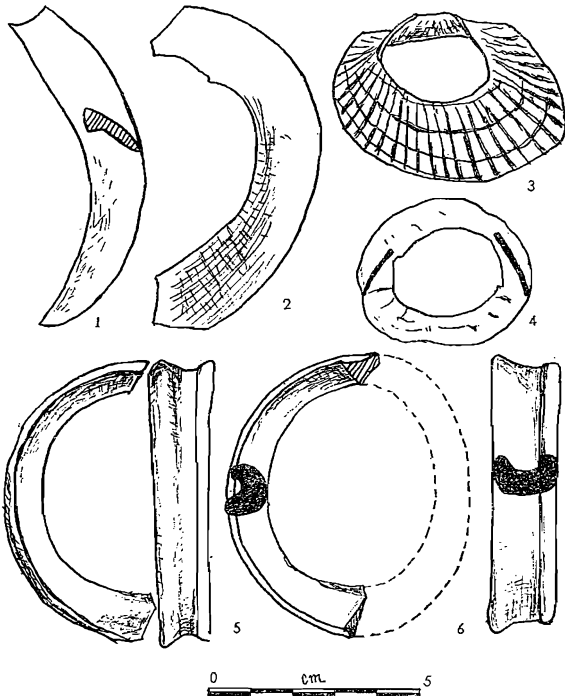
筈状骨器 (第11図7・8) 骨を扁平に削つ
て筈状にした骨器の断片と思われる破片で、
基部は残存しているが先端が欠失している。
基部の頭部は両側から抉り込みが付けられて
いる。

骨針 (第11図10~12) 骨を丸く削つて身と
したものと、骨の破片を利用し先端を尖がら
したものとがある。

骨弭 (第11図9) 骨弭と称せられる角筈形
をした骨器で、基部の下から内部に抉り込み
があり、外面には鏢のような抉り出しがつけ
られている。弭ではないであろうが、使用の
目的の不明なものである。

骨製管玉 (第11図13・14) 鳥骨を短く切断
ただけで、管玉形をなすものである。長さ
2.5cm, 1.5cm, 1.2cmの3個が採集された。

角牙製輪 (第11図15・16) 小形の輪で、一



第12図 貝輪と土輪

方は外径1.3cmの小形のものである。牙で作られている、装身具であろう。他方は角で作られた外径2.5cmの大きさのもので、三ヶ所に装飾的加工が施されている。丁度指輪大のものである。

異形骨角器(第11図17) 鳥骨の径1.3cm長さ8cmの中央部に二つ並べて孔を穿つてあるもので、一部欠けているが、笛にでも使用したものではないかと推定されるものである。

VI 貝殻製品 貝輪(第12図1~4)

貝殻製品は貝輪のみで、その数は多数あつたが、人骨に貝輪をしているのはなかつた。

貝輪は小形のもので完形品が2個あり、それぞれアカガイ・ヒユキノカサで作つたものである。

この小形ものは垂飾具であろうと推定される。沢山出土したのは腕輪に使用したと考えられる大きさのものであるが、完形品はなく、三日月形をした破片である。材料はベンケガイが最も多く、アカガイ・サルボウなどが用いられている。この三日月形をした破片には端に孔を穿つて用いたものは今度採集した中には一片もなかつたが、佐藤氏所蔵品の中に1片ある。

材料はいずれも鹹水産貝類で、淡水産貝類のものは見当らなかつた。しかしこの貝塚が淡水産貝塚であることは、この時代既に海退現象のため鹹水産貝類がこの付近で容易に得られなかつた。従つてその材料を得ることが困難であつたので、それを補うために猪の牙さえ利用しているものが一片ある外、後述の如き土製輪が沢山作られている。

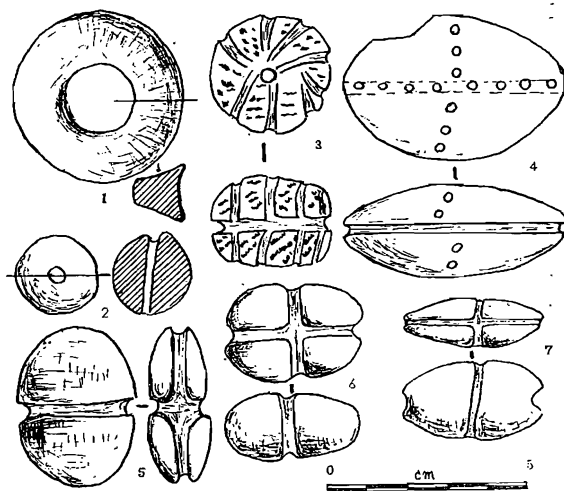
VII 土製品

土器以外の土製品では、本遺跡を特色付けている土製輪と土錘の外に土偶などがある。

土製輪(第12図5・6, 第13図1) 上述の貝輪の形を土で作つて焼いたと考えられるもので、完形品はないが、貝の材料の不足を補うために作つたものではないかと推定された。断片であるが数は10数片出土している。この外に小形の円形の輪がある。図に示したものは外径4cm・内径2cmのもので完形品で採集されたものである。類似品は佐藤氏所蔵品の中にも二三個ある。紡錘車と見るべきものかと考えられる。

土錘(第13図3~7) 今回の調査によつて出土したものは1個だけで、AT第4層から出土したものである(5)。しかし佐藤氏所蔵品の中には20個以上ある。紐を結びつける溝の付けてあるものと、更に溝の外に紐を通す孔の穿つてあるものがある。形は楕円形のものが多く、その外円形、半月形のものもある。なお表面に文様を施してあるものさえある(3・4)貝塚が淡水産貝塚であることに関連して考えられる、本遺跡を特色付ける漁撈具である。

土偶(図版第一C図) 土偶は完全なものは出土せず、頭部・胸部・四肢等の断片だけで、佐藤氏所蔵のものも同様である。今度発掘されたものは頭部4・胴部2・四肢6で何れも個体を異にしている。土偶の作りに胴部の中空のものはなく、佐藤氏所蔵品でも数個ある中1個だけ中空である。それは晩期特有の象徴的文様が施されているが、全体として見ると割合写実的傾向の強いものが多い。図版に示した土偶はどれも目・鼻・口が判つきり表現されている。このように表現された土偶は後期の時代か、晩期ではC₂式以後の時代のものである。その中4のものはその頭部の文様からA



第14図 土製品実測図

式のものであるが、他のものもそれに近い頃のものとする方が良いであろう。

異形土製品(図版第一C図5)一アオムシのような形をした土製品で、背の中央部に小突起がある。石で作った類似品が縄文晩期の遺跡から出土していることが報告されているが²⁰⁾、石冠の菱形でないかと云われている。何を象つたものか明らかでない。縄文晩期のものである。

V 人骨埋葬の推定年代

本貝塚に出土の人骨については、別に精しい報告が期待されるので、私は貝島貝塚を調査した結果に基づいて人骨埋葬の推定年代について一応の所見を述べて置く責任もあるので、最後に一言触れて置く。

人骨の発掘されたB地点はA地点に隣接している点から、地層の状態はA地点と同様であつたと推定される。然しそれがAT第4層に当る貝殻混合土層が消滅してしまつてゐるのは、人体埋葬のため、しばしば掘り返された結果であろう。かく考えると人骨はAT第2層にまでくい込んで埋葬されているが、それは第2層の形成された時期に埋葬されたものでなく貝殻が形成された以後に埋葬されたものであろう。

本遺跡に於いて貝塚が形成された時期は第4類土器の縄文後期末から第12類の晩期末までの時期であつたと考えられるから、縄文後期末以後であるとは間違いないであろう。縄文後期末以降でも更に時代を限定すれば、10号人骨の背椎骨の下から大洞BC式の復原可能な土器(図版第一A図2)が出土したこと、又9号人骨の頭蓋骨が大洞B式の土器の大きな底部を枕にしていたことなどを考えると、少なくともそれらの人骨はそれ以後の時期に埋葬されたものであることは否定出来ない。

次に、13号人骨の上部、表土直下の所から大洞A式の完全土器が無きまゝ出土したことは、この土器が後世ある意図を以つて埋られたものではなく、当時のまゝの状態を物語るものとすれば、この土器以前に人骨が埋葬されたことになる。かかる考えは人骨を発掘して行く際、人骨の傍から大洞C₂式の復原可能な土器が出土したり、32年度の調査の際は完全土器が出土する例さえ見られたことによつて、根拠付けられる。即ちその人骨の傍に同時に埋められた土器がその後の攪乱を免かれて発掘されたことを物語るもので、以上の年代推定の可能性を証明する材料になると思う。かく考えると人骨の埋葬は大洞BC式の時期以後、A式の時期以前で、大体C₂式かA式の頃のものであろうと推定される。そのことはこの地点に於いて貝層がその後形成される期間の短かゝつたことを物語り、人骨の埋葬されている部分に貝殻混合土層のない原因でもあつた。また一面この時期には、A地点と考え合せば、B地点でも貝殻混合土層が相当形成されていたものであるが、それを掘り起して人体を埋葬することになつたので、その貝殻混合の土壌が人骨の周りを取り囲むことになり、それが遺体の骨髄を良好に保存する結果にもなつたと思う。

VI む す び

貝島貝塚は迫川流域の貝塚群の一つであることによつて明らかなように、この貝塚の所在する夏川流域低地から宮城県にかけての迫川流域の低地は、新石器時代には陸地でなく湖沼であつて、石巻付近で海に出る湾の一部であつた。従つて迫川流域附近まで海水が入り込んでいたことは、この地域の貝塚に淡水産貝塚と鹹水産貝塚が半々に所在することによつて知られる。然し鹹水産貝類の貝塚の時期は、縄文前期大木2b式の土器を出土する貝塚の形成された時期であつて、それ以後の時期になると淡水産貝塚が主となつて来る。これは海退現象に伴つて、海水が次第に遠のいて行くこ

註 音喜多富寿「考古資料小報」,(八戸史苑,第3号)

とを物語っている^註。

貝鳥の丘陵に人が住むようになったのは、現在明らかになったところでは、縄文中期後半頃からであるが、その頃には貝塚を形成するまで人が多く住んでいなかったと思われる。この地に貝塚を形成する程に人が住むようになった時期は、その出土土器が示すように縄文後期末になつてからである。その頃は海退現象も進み、貝鳥貝塚周辺は全く淡水の湖沼であつたと考えられる。而も現在の夏川流域の平坦な地形によつて推定されるように浅い湖沼であつたと考えられる。そのためタニシやタガイの棲息が多かつたものであろう。従つてこの地に住む人々はこれらの貝類を食料として生活していたので、驚くべき多量のタニシやタガイの貝塚を形成することになつた。

又このような浅い湖沼では余り大きな魚は棲息せず、雑魚のような小魚が多かつたであろうか、釣針のような漁撈具が使用されず、土錘を利用する漁網が使用されることが多かつたと思われる。釣針が出土せず、土錘が数多く採集されていることはこのことを物語るように思われる。兎に角この貝塚は貝類ではタニシとタガイ、漁撈具では土錘を利用する網によつて特色付けられている。

この貝塚には鹹水産の貝類も極く僅が存在する。これらの貝類は食用に供せられたこともあろうが、貝殻を加工して貝輪などの装身具を製作するために海岸地方から手に入れたものであろう。それにはアカガイやベンケガイが珍重された。然しそれらの貝類が容易に得がたかつたので、それに代るものとして土製輪を作つた。この貝輪や土製輪の使用は海岸地方の人々の風習であつたか知らないが、内陸部に於いては一般に行われたとは考え難い。それは岩手県の場合、この貝塚の時代と同じ大洞C₂式からA'式までの時期の土器を出す胆沢郡前沢町白山川岸場遺跡に於いては腕輪の類は殆んど存在しなかつた。

この貝塚を形成して住んでいた人々は、魚貝類をとつて食用とすると共に、鳥獣類をとつて食用としていた。相当量の鳥獣類の骨角の出土、狩猟具としての石鏃・石槍・根ばさみ等の出土や調理用の石七などの出土はこれを物語っている。狩猟された獣類は猪・鹿・兎等である。これらの獣類は貝鳥丘陵に続く蝦島の丘陵地帯に相当棲息していたものであろう。

以上のように、この地に住んだ石器時代の人々は、農耕栽培の術を知らなくとも、水の幸と山の幸に恵まれて、食料に追われることなく生活出来たことが、種々の装身具を作る余裕をもつことになつた。貝輪や土製腕輪・玉類が比較的多く発見されている。またそのことは精神生活の上にも、集団墓地を営む程にまで高まつた生活をせしめた。

最後に、このような生活を営んでいた貝鳥貝塚人が、どのような系統の人類であるか、原始東北人がどのような系統の人種であるか問題になつている際、その人類学的調査の発表が俟たれることを述べて終りとする。

追記

川目第4類については拙稿「岩手県綾川村（現盛岡市）川目遺跡調査報告」（本年報第7巻）

日戸第5類については拙稿「岩手県日戸遺跡調査報告」（本年報第10巻）

尙調査の整理に当つては昭和31年度科学研究助成金の補助をうけたことを付記する。

